経営中止の危機からの逆転

ー土づくりが生む絶品「美蘭牛　福姫」ー

有限会社福田農場（肉用牛肥育経営・北海道本別町）

地域の概況

㈲福田農場の所在地である北海道本別町は、十勝地方の北東部の内陸に位置する緑豊かな美しい町で、人口は6,200人となっている。主要な産業は農業や林業、工業であり、農業においては小麦、豆、甜菜、酪農、肉用牛等の生産が盛んである。特に豆が有名で「日本一の豆のまち」といわれ高く評価されている。

（写真１）左から妻の由美さん、代表の博明さん、従業員の星さん

（表１）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
平成元年	酪農　肉用牛育成 豆　甜菜　小麦	経産牛40頭 乳雄もと牛300頭	35ha	北海道文理科短期大学卒業後、実家で就農
平成３年				㈲福田農場設立（法人化）
平成６年	肉用牛育成 豆　甜菜　小麦	乳雄・交雑種 もと牛600頭		酪農中止 肉用牛育成を中心とする
平成７年				大家畜経営活性化資金の借入
平成17年	肉用牛育成 豆　小麦			会社の代表に就任 体調不良により入院
平成18年	肉用牛肥育 豆　小麦	乳雄・交雑種 もと牛600頭 乳雄肥育牛90頭		肥育牛舎新築 SRU（Soil Research Union）加入
平成22年		乳雄・交雑種 もと牛600頭 乳雄肥育牛270頭	45ha	肥育牛舎２棟新築
平成25年		乳雄・交雑種 もと牛600頭 肥育牛500頭	65ha	肥育牛舎新築 交雑種の肥育開始 堆肥を肥料登録する
平成27年		乳雄・交雑種 もと牛700頭 肥育牛900頭		「美蘭牛　福姫」を商標登録。レストラン・精肉店で販売 ほんべつ肉祭りを立ち上げ 北海道酪農畜産協会によるモニタリング開始 牛舎が過密だったので、頭数を減らす
令和２年		交雑種 もと牛500頭 肥育牛700頭		HIS（旅行会社）と取引開始 全国のレストラン、ホテルに福姫を提供する

（表２）経営実績

経営の概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）		家族・構成員	2.2人
			雇用・従業員	1.1人
	飼料生産	実面積		6700a
	肥育牛平均飼養頭数	肉用種		0頭
		交雑種		1213.0頭
		乳用種		0頭
	年間肥育牛販売頭数	肉用種		0頭
		交雑種		678頭
		乳用種		0頭
収益性	所得率			11.9％
	出荷肥育牛１頭当たり生産費用			590,697円
生産性	肥育（品種・肥育タイプ）（交雑種雌若齢）	肥育開始時	日齢	41日
			体重	54kg
		出荷時	日齢	765日
			体重	737kg
		平均肥育日数		724日
		販売肥育牛１頭１日当たり増体重（DG）		0.943kg
		対常時頭数事故率		2.6％
		販売肉牛１頭当たり販売価格		736,090円
		販売肉牛生体１kg当たり販売価格		999円
		肉質等級３以上格付率		52.1％
		もと牛１頭当たり導入価格		113,844円
		もと牛生体１kg当たり導入価格		2,108円

気候は十勝特有の大陸性気候で、夏は35度以上になる一方、冬の寒さは厳しく氷点下25度を下回ることもあり、寒暖差が大きい。晴天日数が多く、道内では積雪量の少ない地域である。

経営・活動の推移

・短期大学卒業後、実家に就農～法人化

博明氏は平成元年に北海道文理科短期大学を卒業後、酪農と肉用牛、畑作の複合経営を営む実家に就農した。当時はホルスタイン経産牛40頭、ホルスタイン去勢もと牛300頭を飼養し、小麦、金時豆、小豆、甜菜等の多様な作物を生産していた。労働力は家族のみで、毎日の仕事は大変だったが、農業にやりがいを感じていた。

平成３年には家計と事業を分離して経営状況を明確化するために、㈲福田農場を設立し、父が代表者、博明氏は役員に就任した。

・経営中止の危機から肉用牛部門の拡大を決断

父は本別町農業協同組合の理事と町議会議員を務める立場であり、周辺の離農者９件の負債を肩代わりして農地の引受を行っていた。

平成６年に所有地の評価額見直しが実施されたことにより債務超過となり、農協から経営中止の勧告を受けた。一時は廃業も考えたが、生産状況は良好であり、地元で多大な貢献をしてきたことから、保証人を３人つけることで経営が存続できることになった。

負債の返済のためには売上高の増加が必須であることから、手間のかかる酪農を中止し、肉用牛部門の拡大を決断した。毎日生乳を生産できる酪農とは対照的に、肉用牛経営は売上が安定しないため周囲からは反対されたが、限られた労働力で多くの頭数を扱うことができる肥育もと牛販売に活路を見出した。

平成７年から平成11年には既往負債を大家畜経営活性化資金に借り換えし、償還圧を軽減することで、キャッシュフローが黒字化し、経営が安定した。毎年着実に負債を返済し、令和元年には大家畜資金を完済している。

・突然の父の死、自身の体調不良で考えたこと

平成17年に父が交通事故で亡くなり、博明氏が会社の代表となった。父の突然死による精神的ショックに加え、仕事量が急増して肉体的な疲労も重なり、博明氏は体調を崩して入院することになった。病院のベッドの上で、今後に思いを巡らせていると、長年の夢だった「自分で育てた牛を食べてもらいたい」という気持ちが溢れ、肥育に取り組むことを決意した。

・念願の肥育開始も、成績は低迷

平成18年に肥育牛舎１棟を新築し、ホルスタイン雄の肥育を開始した。今まで肥育もと牛で販売していた一部の個体を保留し、段階的に肥育牛の頭数を増やし続け、最終的に全

（写真２）哺育牛

（写真３）育成牛

（写真４）肥育牛

頭肥育出荷になった。

その後、平成22年と平成25年にも肥育牛舎を建て、交雑種の肥育も開始した。発酵飼料を与えて肥育し、肉の味は高く評価されていたが、従来の格付基準では単価が低く、枝肉重量も小さかった。１頭当たりの利益が低いため、頭数を増やすことにより収益を確保することを目指し、一時総飼養頭数は1,600頭まで増加した。

・関係者一丸となって肥育成績改善を実現

平成27年に日本政策金融公庫、十勝畜産農協および北海道酪農畜産協会による肉用牛ABL協定に基づき飼養牛を担保にして運転資金を融資され、飼養牛のモニタリングと経営助言を受けることとなった。モニタリング開始当初は肥育成績が悪く、酪農畜産協会から牛舎の過密状態が成績低下の一因だと指摘され、1,200頭まで飼養頭数を減らした。

また、十勝畜産農協の紹介により、肥育牛の販売先が１社から３社に拡大し、取引単価も向上した。

平成29年からはロース芯が小さく皮下脂肪が厚い状況を改善するため、酪農畜産協会と飼料会社と協議して、飼料給与内容の見直しを行い、平成29年の平均枝肉重量439kg、ロース芯面積46.1cm^{2}から令和元年には枝肉重量486kg、ロース芯面積52.1cm^{2}と大幅に肥育成績は改善され、収益も劇的に向上した。

経営・技術の特色等

・経営概要

福田農場は、交雑種雌の肥育牛1,200頭に加えて、小麦16haと大豆９haを生産している。また、自給飼料はチモシー主体の牧草43haとデントコーン24haを作付している。畜産に従事する労働力は、代表の博明さんと母、従業員１人の計３人で、妻・由美さんは事務を担当している。

子牛は岩手県雫石町の全農岩手家畜市場から生後１か月で導入している。岩手から導入する理由は、長年付き合いがあり福田農場の環境に合った牛が多いためである。

導入後は、３か月齢まで哺乳ロボットが導入された哺育舎で飼養している。哺育期の体調管理を徹底しており、調子の悪い子牛には抗生物質の静脈注射等の早期治療を行っている。年間事故率は2.64％であり、交雑種雌の全道平均5.92％よりも低い。

３か月齢以降は順次育成舎から肥育舎で飼養し、平均25か月齢で出荷している。年間出荷頭数670頭の平均枝肉重量は485kgと交雑種雌としては大きい。

・土づくりへのこだわり

福田農場では「人間も牛も健康なものを食

（写真５）堆肥

（写真６）肥料

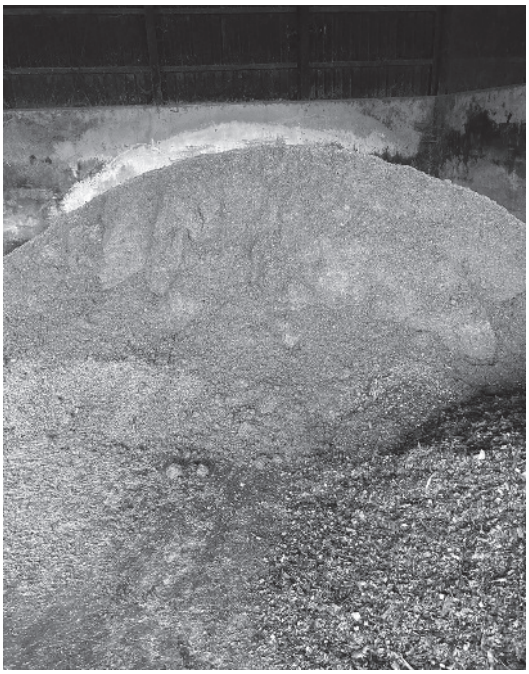
べれば健康に育つ」という考えの下、土のミネラル、微生物バランスを整える取り組みをしている。

土づくりを真剣に考えたきっかけは、経営不振農家の土地を引き受けたことにより、条件の悪い農地が多く、作物が育ちにくいからであった。

平成7年から土壌分析を開始した。当時の土地は化学肥料の過剰投入により、ミネラルバランスが崩れていたが、堆肥を利用し、畑ごとに足りない栄養素を補う管理を地道に継続した結果、３～５年すると少しずつ成果が見えてきた。

平成18年には北海道SRUに加入した。SRUとは、Soil Research Union（土壌研究組合）の略で、オーストラリア在住の農業コンサルタントのエリック川辺氏の提唱する土づくりを実践する農家のグループである。SRUの特徴は、微量元素まで網羅した精密な土壌分析を実施し、必要な成分のみに絞った施肥設計をすることである。畑ごとに土壌サンプルを採取し、アメリカのラボで分析を実施している。施肥設計は畑によって異なり、作業の手間はかかるが､肥料と農薬の使用量は半減し、殺虫剤は一切使わなくなった。

堆肥づくりにも力を入れていて、牛ふんに木くず、枯草菌を混ぜ合わせ、長期間熟成発酵させている。平成25年には農林水産省に肥



（写真８）デントコーンサイレージ

（写真７）オカラサイレージ

料登録し、自社で使うだけでなく、「美蘭別の土にこだわる農家が作った肥料」という商品名で販売している。

・発酵飼料の給与

オカラとデントコーンのサイレージを給与している。オカラサイレージは地元の飼料会社から購入しており、嗜好性が高い。デントコーンは完熟に近い状態で刈り取り、低水分で発酵させることで、デンプン質が高くなり、濃厚飼料を削減できる。

発酵飼料を給与することにより、牛が健康になり、美味しい牛肉に仕上がる。また、ふんの状態が良くなり、敷料の交換頻度を減らすことができる。

・自社ブランド「美蘭牛　福姫（びらんぎゅうふくひめ）」

平成27年に商標登録した。農場が所在する美蘭別地区と、福田農場の「福」、雌牛のみのため「姫」を組み合わせて名付けている。

赤身の旨味が強く脂に甘みがあって美味しいと好評をいただいており、今まで食べた牛肉で１番美味しいと言ってくださるお客様も多い。

福姫は「ほんべつ肉まつり」でも出品され、地元の方にも愛されている。また、令和２年には旅行会社HISのプロジェクトに採択され、環境循環型の飼育方法について情報発信し、ECサイトでの販売も行っている。

現在、道内外の様々な高級レストランやホテルで福姫が提供されており、シェフが農場の視察に訪れることも多い。

・作業の省力化

福田農場では、少ない労働力で適切に管理するため、作業の内容によりメリハリをつけ、労働効率を最大化している。

例えば、牛の管理では事故が発生しやすい哺育牛には手厚く、育成～肥育中期は手をかけ過ぎず、肥育後期では転倒事故防止のため見回りをしっかりしている。また、子牛は哺乳ロボットでミルクを飲ませ、離乳以降の給餌作業はほとんど機械で行う等、省力化のための設備に投資している。

地域に対する貢献

博明氏は本別町農業委員、農業推進会議構成員、美蘭別自治会長等を務め、地域のリー

（写真９）福姫PR写真

（写真10）レストランで提供される様子

ダーとして活躍している。

中小企業同友会の役員でもあり、異業種との交流も推進してきた。さまざまな講師を呼んだ勉強会やイベントを企画し、地域での信頼も厚い。

女性の活躍・働きやすい現場環境づくりの取り組み

・女性の活躍

現在、博明氏の母は軽作業、妻・由美氏は事務を行っており、無理のない範囲で働いている。

・働きやすい職場づくりの取り組み

平成28年から地元出身の20代男性従業員１名を雇用している。牛が大好きで、熱心に仕事をしてくれている。

福田農場では就業規則を制定し、農繁期以外は休暇も取得しやすい体制を作っている。また、給与水準は同業他社より高い。

従業員に対して心がけていることは、仕事しやすい環境を整備することで、特に安全性には十分配慮している。

将来の方向性

・次世代への継承

博明氏は現在53歳とまだ若く、後継者は未定である。娘が２人いるが、札幌で一般企業に勤めており、経営を引継ぐ意思はない。

・今後の経営計画

現在の飼養規模を維持し、より美味しい牛を目指している。

福姫は今後もさまざまなお店で扱っていただき、多くの人に食べてもらうために、土づくり・牛づくりの取り組みを情報発信する。